

現EV市場の**48倍**・スマホ市場の**77倍**・AI市場の**133倍**の規模が予測される

新・産業革命

エヌビディアが日本企業と手を組み進める
世界初のチャレンジとは？

“この分野からテスラ史上最大の製品が生まれる。
テスラの価値の**80%**はこの分野の製品になる”
— イーロン・マスク / テスラCEO

“AI分野の中で**最大級**のチャンスになる”
— キャシー・ウッド / 女性版バフェット

“あらゆる産業の中で**最大**の産業になる。
これは**50兆ドル**規模のビジネスチャンスになる”
— ジェンスン・フアン / エヌビディアCEO

舞台は東京、皇居周辺。

エヌビディアCEO：ジェンスン・フアンの招待のもと、2つの密会が行われました。

その密会が行われたのは、丸の内にそびえ立つ大企業の本社でもなければ、高市首相が待つ首相官邸でもありません。

1つ目の密会が行われたのは、サラリーマンが仕事帰りに立ち寄るような神田にある小さな居酒屋。

そして2つ目の密会が行われたのは虎ノ門にある普通のトンカツ屋。

しかし、その扉の向こうに集う顔ぶれは決して「どこにでもあるもの」ではありませんでした。

1つの密会には、日の丸半導体復興の要を担うキオクシア、半導体の性能を図る門番アドバンテスト、世界の半導体向上を支える東京エレクトロン。

その他、日の丸半導体を支える計16社の企業が集結。



2つ目の密会にも壮々たる顔ぶれが並びます。

産業の自動化で世界を牽引するファナックと安川、国防2大巨頭の一部：川崎重工、企業のデジタル基盤を支える富士通。

分野は違えど、日本を代表する企業が集結しました。

FANUC

YASKAWA

Kawasaki

FUJITSU

この2つの密会で何が語られたのか？

そしてなぜ、名だたる日本企業が召集されたのか？

その答えは密会後に開かれた経済産業省主催のイベントにて、ジェンスン・フアンの口から放たれました。

「次の産業革命を起こす。」

その言葉とともに、私たちが**EI革命**と呼ぶ巨大なチャンスの始まりを宣言したのです。

テスラCEOのイーロン・マスクは、「**EI分野からテスラ史上最大の製品が生まれる。この製品からテスラの価値の80%が生み出される。**」と発言。

また、女性版バフェットの異名を持つキャシー・ウッドは「**AI分野の中で最大級のチャンスになる。**」という言葉を残しています。

そして、AI分野の最前線を走るエヌビディアのCEO、ジェンスン・フアンは「**あらゆる産業の中で最大の産業になる。**」と表現しています。

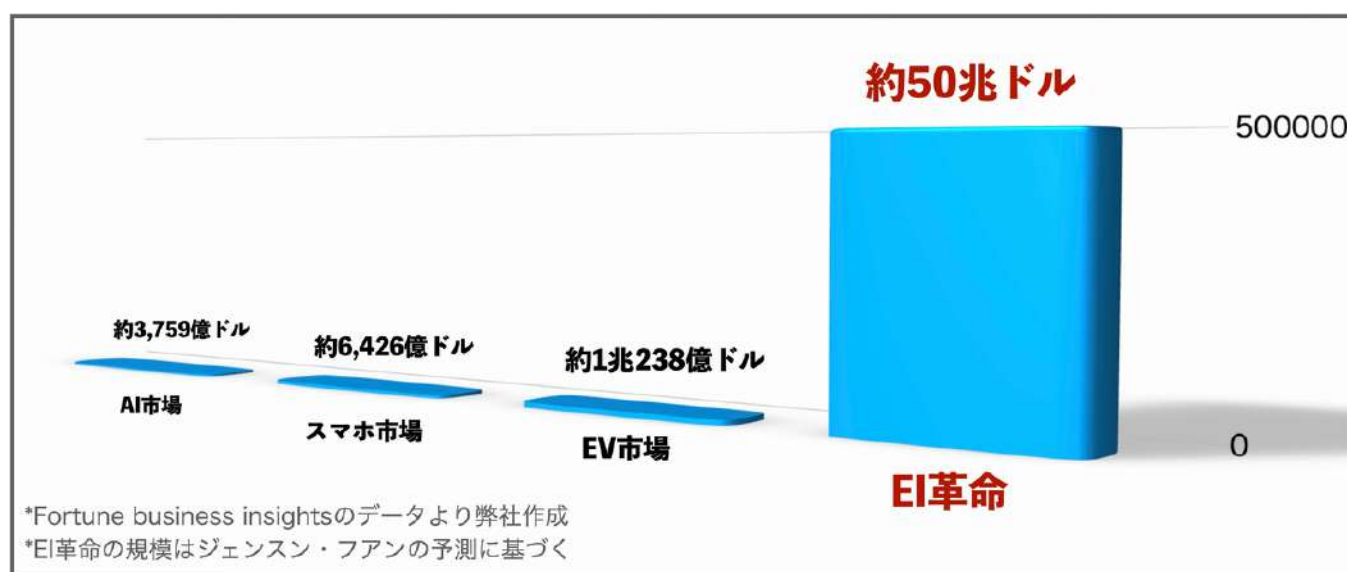
フォーチュン・ビジネスインサイツの調査によると、現在のAI市場全体の規模は約3,759億ドルになると予測されています。

また、世界のスマホ市場全体の規模は約6,426億ドル。そして、EV市場の規模は約1兆238億ドルと予測されています。

これらのメガトレンドは、エヌビディアやアップル、テスラを現在の地位にまで押し上げた正真正銘のメガトレンドです。

しかしジェンスン・フアンが予測するEI革命の規模は「50兆ドル」。

これから始まるEI革命は、これらのメガトレンドが生み出している価値の合計の24倍もの規模になると予測しているのです。



そして今、世界のテクノロジーは既に、来たるEI時代に向けて動き出しています。

イーロン・マスクはこの分野の製品を量産体制へ移行させることを宣言しました。

ジェンスン・フアンは「EIはChatGPT登場時と同じ瞬間を迎えている」と発言し、EI専用の新製品を発表。

高市首相は、つい最近、日本の成長戦略の1つとしてこの分野に対して2040年までに10.5兆円もの投資を決定したばかりです。

もしあなたがAI革命からリターンを狙うための銘柄を知っていれば、50兆ドル規模のチャンスをもにすることができるでしょう。

確かに、今たびたび名前が挙がったエヌビディアに投資をしてもある程度のリターンは得られるはずです。

しかし今や、エヌビディアは世界トップの企業。

恩恵を受ける可能性は高いですが、2倍3倍、あるいは10倍のリターンを狙うには時間がかかることでしょう。

しかしいいニュースがあります。

それは**私たちが2017年の段階から、このトレンドに目をつけ、実際に87倍の株価成長を実現した実績がある**ということです。

その後も調査を続け、テスラに足を運んだこともあります。

さらに1,500人以上の日本人投資家に向けて講演を行い、**市場平均の2.6倍ものリターン**をもたらしたこともあるんです。



そして、私たちは約10年間続く調査の末、エヌビディアCEOが「**新たな産業革命**」と評する、このトレンドの鍵を握る、**小さなチップメーカー**を特定しました。

私たちが発見したのは、EI革命における3つの急所を握る企業。それも
時価総額は**エヌビディアの100分の1***にも満たない企業です。
(*2026/7/24時点)

これこそが、50兆ドル規模のトレンドからリターンを狙う「抜け道」
となるでしょう。

この電子雑誌を読んでくれているあなたとは、何かのご縁があるよう
なので、今日は**EI革命からNo.1のリターンを狙うための企業をご紹介します。**

さて、ここ数年で投資資金を**2倍、10倍、時には13倍**にするようなリ
ターンを得ていた投資家があります。

彼らは来たる需要爆発に先回りをした投資家、もっと言えば、私たち
がお届けする情報を手にしていた投資家です。

AIが目目の前の情報を判断する際に必要なGPUを作るエヌビディアは、
購入推奨から**4年で+1,064%**の株価成長。



データを記憶するために必要な高性能メモリを作るマイクロンは、購入推奨から3年で+1,254%の株価成長。



宇宙空間における衛生の安定稼働に必要な半導体を作るSTマイクロは購入推奨からわずか1年で+188%の株価成長を遂げています。



私たちはこのような推奨を行ってきました。これらは膨大なリサーチを重ねた結果であり、少し自慢でもあります、ただ過去の成功を並べているわけではありません。

注目すべきなのは、私たちが早期に発見し、日本人投資家にお届けしてきたのは

- **AIの発展を支える頭脳半導体**
- **データの記憶を司る記憶半導体**
- **険しい宇宙環境でも機能する宇宙半導体**

それぞれのテクノロジートレンドを牽引する半導体を作る企業だったということ。

そして今回も、数々の半導体企業の可能性を見抜いてきた私たちがEI革命を牽引すると分析したエリートチップメーカーを特定しています。

その企業は、EIの発展に必要な3つのピースを全て兼ね備えている企業です。

早速その企業の詳細をお伝えしていきます。

ですがその前に、

- **エヌビディアCEOが次の産業革命と呼ぶEI革命の正体**
- **EI革命が単なる投資家にとってのチャンスではなく、必然的な事象である理由**
- **50兆ドル規模のチャンスからリターンを狙う2つの投資戦略**

についてお伝えしていきます。

それでは始めましょう。

Chapter 1

新たな産業革命と流入するスマートマネー

「50兆ドル規模のチャンス」

それはどれほど巨大なチャンスなのか？そしてどれほどの富をあなたの手にもたらす可能性があるのか？

それらは21世紀に起こった3つのメガトレンドを振り返ることで見えてきます。

「今日、アップルは携帯電話を再発明する (Today Apple is going to reinvent the phone.)」

スティーブ・ジョブズが放ったその言葉とともに2007年に発表されたiPhone。

この発表から世界のスマホ販売台数は10年で一気に12倍に加速。その流れを受け、アップルは**10倍以上の株価成長**を遂げました。



次に、2つ目のメガトレンドを巻き起こしたのはこの男、イーロン・マスクです。

「車はガソリンで走るもの」

そんな世界で当たり前とされてきたルールを電気自動車の発表とともに覆しました。

テスラは、小型SUVのモデルYを2020年に発表し、そこから普及率は一気に加速。テスラはその発表から**11倍もの株価成長**を遂げました。



そして3つ目のメガトレンドを生み出したのが、イーロン・マスクとともにOpenAIを立ち上げた男、サム・アルトマン。

2022年11月にChatGPTをリリースし、生成AIの概念は世界へ駆け巡りました。

2ヶ月で1億ユーザーを突破したこの流れに乗り、AIの頭脳を司るエヌビディアは、わずか**4年で13倍もの株価成長**を遂げています。

●エヌビディア

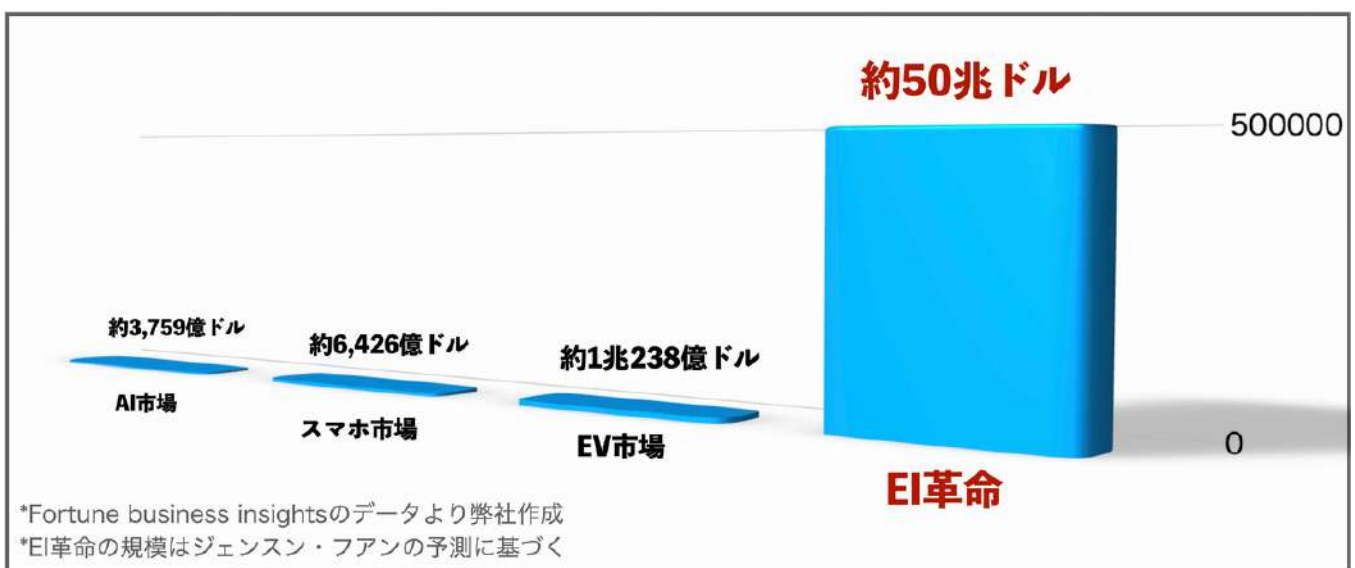


スマホ、EV、そしてAI。

21世紀を象徴する3つのメガトレンドは、初期段階でその波に乗った投資家に莫大な富をもたらしたのです。

しかし今あなたの目の前に広がるのは、それらを超える50兆ドル規模の新たな産業革命。

現在のEV市場の48倍、スマホ市場の77倍、そしてAI市場の133倍。



それほどの規模が予測されているのが、私たちがEI革命と呼ぶ巨大なチャンスです。

このチャンスに対してエヌビディアCEOはこう表現しています。「一生に一度のチャンス」

また、女性版バフェットの異名を持つキャシー・ウッドは「AI分野における最大のチャンス」と表現しています。

さらに、イーロン・マスクは「EI分野からテスラ史上最大の製品が生まれる」とも語っているのです。

この巨大な波をシリコンバレーのビッグテックが見逃すはずがありません。

メタはこのチャンスに乗り遅れまいと新たに開発チームを結成。

テスラは自身を牽引してきたEVの生産ラインを一部終了させ、リソースをこの分野へと移行させました。

またグーグルは企業価値55億ドルを誇る巨大スタートアップや60社以上の企業とパートナーシップを締結し、このチャンスへと身を乗り出しています。

さらにアップルも、iPhoneに次ぐ新たな収入源を生み出すためこの分野へと進出。

アマゾンもマイクロソフトもエリート社員をかき集め、この分野への進出を決定。

そして、ウォール街の機関投資家も、この名だたるビッグテックの動きを早期に察知し、巨額の資金を投じています。

ブラックロック、フィデリティ、UBS、インベスコ。

金融エリートが集うこれらの機関も、それぞれ数百億円規模の資金を投資家から募り、EI分野へ投資しているのです。

この資金の動きはデータとしても明確に現れています。

事実、この分野に関連するスタートアップ企業への投資額は、**ここ2年で約5倍にまで跳ね上がっています。**

あなたが投資をしても、あるいはしていなくても、まさに今、世界の富が同じ方向をへと向かっているのです。

しかしここで重要なのは、巨大な資金が動いているのは単に「有望だから」という理由だけではありません。

その将来性の裏には、EIが「実現すればいい」という域を超え「**実現しなければならない**」そう裏付けるだけの理由があったんです。



Chapter2

世界が抱える時限爆弾

今、世界はある**共通の時限爆弾**を抱えています。米国は愚か、ヨーロッパや中国、そして私たちが住む日本でもその時限爆弾は刻一刻とカウントダウンを進めている最中です。

この問題を放置しておけば、企業は作りたいものが作れず、提供したいサービスも提供できず、経済成長そのものが鈍化し、私たちの生活にも少しずつ影響が及んでくることでしょう。

いや、一部の地域では既にその影響がで始めているかもしれません。

それは資源不足でもなければ、エネルギー不足でもありません。

世界中の企業や政府が抱えている真の課題は別のところにあります。

イーロン・マスクはこの問題がきっかけで「**日本はいずれ存在しなくなるだろう。**」と発言したこともあります。

また、デロイトトーマツの報告書によると、この課題は「**企業が最も優先的に解決すべき課題**」と位置付けられています。

さらには、エヌビディアCEOも「**世界中の企業がこの問題を抱えており、それが企業の成長を制約している。そしてその問題を解決できるのはEIである**」とも語っています。

世界が抱える時限爆弾、それは「**人手不足**」です。

人手不足は、もはや企業努力だけでは解決することのできない規模にまで膨れ上がり、世界経済そのものを左右するテーマとなっています。

そして、その課題の解決方法として企業や国家が血眼になって取り組んでいるのが**EIの実現**、すなわち**フィジカルAIの実現**なのです。

フィジカルAIと聞くと、多くの人は人型ロボットを思い浮かべるかもしれませんが。

それは決して間違いではありませんが不十分です。

- 自ら判断して走行する自動運転車
- 現実世界を認識し次のスマホとも呼ばれるスマートグラス
- 物流や点検を自律的に担うドローン
- 自身の判断で工場で24時間稼働し続ける産業用ロボ

これらは全て、画面の中から飛び出し、体をまとったAI、フィジカルAIの一種なのです。

そして、この世界的な課題を解決するべく、ジェンスン・フアンは日本を選びました。

これこそがエヌビディアCEOが日本企業を招待し、2つの密会を開いた理由です。

かつて世界を席巻した日の丸半導体16社を取り込み、ものづくりのニッポンを作り上げた4社と手を組むことを決め、**世界初となるフィジカルAIインフラを誕生**させたのです。

これは「人手不足」という構造的な問題を解決すべく、エヌビディアは利益を独占する道も、自社で全てを完結させるという道も切り捨て、日本と手を組んだ瞬間です。

動き出したのはエヌビディアだけではありません。

この動きは企業の域を超え、**国家をも巻き込む大きな資金の流れ**を作り出しています。

事実、米国ではトランプ大統領の号令のもと、**フィジカルAIを含む産業分野への投資を最優先事項の1つ**として取り上げています。

そして、その動きに呼応するかのよう、**政府当局が21社の関連企業を召集し、フィジカルAIの技術連合を発足させたばかり**です。

7月には、**ヨーロッパでフィジカルAIの国家プロジェクト「FORMOVE」が始動**しています。

私たちの住む日本でも、経産省とソニー、ソフトバンク、NEC、ホンダが中核となり計44社のフィジカルAI団体「FRONTia」が結成されているんです。

さらに、高市首相は2040年までに**10.5兆円もの資金をフィジカルAIに投資する意向を示す**など、その本気度は留まるところを知りません。

このように、世界のビッグテックと国家が総力を上げ、50兆ドル規模のチャンス、そして人手不足の構造的な解決に向けて、動き出したのです。

おわかりいただけたでしょうか？

フィジカルAIという名の「次の産業革命」は来るかどうか？という話ではなく「来なければならない」いや「**いつ来るのか？**」というところまで来ています。

そしてそのシグナルは国家プロジェクトという形で既に世界各国で点灯しているのです。

Chapter3

フィジカルAIからリターンを狙う2つの方法を公開

それではいよいよ、フィジカルAIトレンドから今すぐ利益を狙うための**2つの投資戦略を公開**します。

まず1つ目が、先ほど名前が挙がったような「**エヌビディアと手を組んだ日本企業に投資をする**」ということです。

彼らもフィジカルAIを世界最高の企業とともに裏側で支える企業の一部です。

私たち大富豪の投資術も、今挙げた日本企業のように、トレンドの裏側で拡大を支える企業を調査し、多くの日本人投資家に向けて、数多くの推奨をお届けしてきました。

冒頭にご紹介したエヌビディアも、マイクロンも、STマイクロもまさにメガトレンドを裏側から支える、そんな企業の1つです。

投資の世界では、この考え方を「**ツルハシとシャベル戦略**」と呼びます。

「ゴールドラッシュで最も儲けたのは、金を掘る人ではなく、ツルハシやシャベルを売る人だった。」そんな歴史に由来する、有名な投資戦略です。

もちろん、これもいい投資戦略です。

フィジカルAIトレンドに進出しているビッグテックは多い分、それほど投資の選択肢は広がります。これは裏を返せば、当てに行くのが難しいということです。

だからこそ、ツルハシとシャベル戦略を使うのは、合理的な選択肢と言えるでしょう。

しかし、50兆ドルの新たな産業革命であるフィジカルAIから、より効率的にリターンを狙いたいのであれば、もっとおすすめしたい戦略があります。

この戦略を使うことで、**ツルハシとシャベル企業に投資をするよりも約2倍、時には11倍ものリターン**を得ることができていました。

例えば、今や米国株投資をしている人であれば99%が知っているエヌビディア。

この企業もAIというメガトレンドのツルハシ企業です。

データセンターを動かすためのGPUでシェア85%を握っており、データセンターが増えれば増えるほど、エヌビディアにお金が落ちるような仕組みになっています。

その結果、エヌビディアはChatGPTのリリースから**+1,124%**の株価成長を遂げました。

ですが、その裏では**エヌビディアの約2倍のリターン**を叩き出した銘柄があります。

それがバーティブという企業です。

この企業はデータセンターに使う冷却設備や電源装置、監視システムなど複数の分野から収益を得られる構造になっています。

複数のツルハシを持つこの企業は、データセンターの拡大とともに**+2,174%**の株価成長。エヌビディアの約2倍の株価成長を遂げることにしました。

●エヌビディア

●バーティブ



また、スマホの時も同じような動きが見られました。

スマホを生産する企業に対して、通信用チップを提供しているクアルコムという企業があります。

この企業もスマホが製造されるほど、通信チップ需要が高まるため、スマホというメガトレンドの中のツルハシ銘柄と言えるでしょう。

ですが、同じような立場の企業であるブロードコムはどうでしょうか？

彼らがアップル向けに提供するのは、通信チップや物体を検知するセンサー、タッチコントローラーなど複数の製品にわたります。

複数のツルハシを所有するブロードコムは過去10年間で+3,041%の株価成長。

ツルハシをほとんど1つしか持たないクアルコムの11倍の株価成長を遂げるようになりました。



つまり、一度のメガトレンドで二回、三回美味しい複数のツルハシを所有する企業に投資をすることで、メガトレンドを取り巻く複数の分野からスマートにリターンを狙うことができるということです。

そして私たちは、この戦略に完璧に合致する1つの小さなエリートチップメーカーの特定に成功しました。

その企業は、ウォール街からはるか3,800km西側の荒野にたたずむ、文字通りアナリストのレーダーの外にある企業です。

Chapter4

フィジカルAIの3つの鍵を握る エリートチップメーカー

それでは今から、フィジカルAIトレンドにおいて複数のツルハシを持つ企業の詳細をお伝えしたいと思います。

実は私たちレガシーリサーチチームは、2017年からこのトレンドが到来することを予測していました。

そこで推奨したのがフィジカルAIの頭脳の役割を果たすエヌビディアです。

まだ、AIの概念すら世界に広まっていないこの段階で、株価2ドルだったエヌビディアを推奨していました。その後の株価成長はあなたのご存じの通りです。

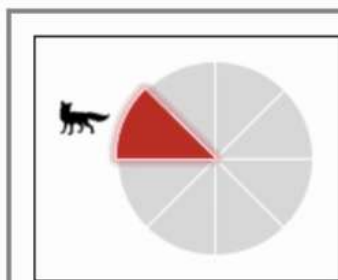
「ロボット脳」のメーカーがもたらす未来より（2017年4月発行）

取るべき行動： NVIDIA（Nasdaq：NVDA）の購入

アセットクラス：成長型

※注

現在は目標株価を超えていますが、今後も成長が見込めると考えられています。



画像のキツネは成長株を表している。キツネは小～中サイズの動物だが、当社の成長株の多くの時価総額とよく似ているのだ。キツネも抜け目なく、素早く、軽快な動物である。そのため、よりよいリターンと少ないボラティリティを目指す当社の成長株にとっては論理的な選択だ。

また同年、公開したこちらのレポートでは、日本企業のファナックを推奨しています。

これはエヌビディアと同様、フィジカルAIで恩恵を受けると分析しての推奨でした。

ロボット業界の「アップル」と言われた“ある日本企業”より (2017年4月発行)

ファナックがマージンを維持できると想定して、概算で30億ドルの利益になる。現在の株式数で言えば、1株あたり3ドルの配当所得だ。

ファナックのPER（株価収益率）は22だ。これは株価は66ドル、すなわち現在の価格から144%の利益をもたらすだろう。

さあ、ファナックでこのロボティクスのトレンドに飛び込み、「機械（マシン）の台頭」に乗って頂上を極めよう。

取るべき行動：ファナック株の購入

購入価格：28ドル以下

損切り価格（ストップロス）：参入価格の50%

アセットクラス：スマート・スペキュレーション

ポジションサイズ：ポートフォリオの1%以下

そして今、私たちがかつて推奨した2つの銘柄は世界初のフィジカルAIインフラを構築するべく、手を取り合っています。

さらに、私たちはこのトレンドを追いかけてテスラの店舗まで足を運び、フィジカルAIの代表格オプティマスの偵察にも行きました。



昨年11月には「AI最終予言」というテーマでフィジカルAIに関する講演を1,500人以上の日本人投資家に向けてお届けしています。



そこでご紹介した銘柄は、為替を考慮すれば、現在まで平均で**+22*%**の資産成長を実現しています。（*2026/7/24時点）

控えめに聞こえるかもしれませんが、これは同期間におけるS&P500の2.6倍の成長です。

中には**+101%**、**+292%**の上昇を遂げた銘柄もあります。

このように私たちは約10年間にわたり、フィジカルAIという新たな産業革命を追い続けてきました。

そして今回特定したのが、**フィジカルAIにおける3つのツルハシを持つエリートチップメーカー**です。

Pick 1 :

フィジカルAIに視覚を与えるセンサー技術

この企業が持つ1つ目のツルハシ、それは**フィジカルAIの目となるイメージセンサー技術**です。

ヒューマノイド（人型）に限らず、自律的に動くロボットは周囲の情報を正確認識できなければ、歩くことも、モノを掴むこともできません。

つまり、フィジカルAIにとって目は、急所となる部品の1つに数えられるということです。

そしてこの企業は現在の自動運転等を支える**車載向けイメージセンサーで日本のソニーをおさえ、世界シェアNo.1の実績**を誇ります。

自動運転の代名詞テスラのEVの目を長年支えていたのもこの企業のイメージセンサーです。

注目すべきは、テスラが現在開発を進めるヒューマノイド「**オプティマス**」は**テスラの自動運転と同じ技術をベースに作られてる**ということ。

つまり、この企業が手掛ける「目」の分野がこの先、テスラ史上最大の製品「オプティマス」を支えるツルハシとなる可能性があるということです。



Pick 2 :

フィジカルAIの心臓を増強するエリート半導体

2つ目のツルハシ、それはこの企業が持つ「エリート半導体」です。

目に加えてフィジカルAIに欠かせないのが心臓の強さ、すなわち稼働時間です。コンセントに繋がずに自律的に動くフィジカルAIの稼働時間は生み出す経済価値に大きな差を生み出します。

そこでも登場するのがこの企業が持つエリート半導体です。特殊素材で作られたこの企業の半導体は電力効率を向上させるだけでなく小型化・軽量化も叶えます。

電力効率の上昇、本体の軽量化。この両方を実現させるエリート半導体は、フィジカルAIの稼働時間に運動性能と燃費を同時に向上させる好循環を生み出すのです。

この企業の技術はエヌビディアにも認められ、次世代データセンターの中核を担うとされています。

Pick 3 :

視覚・心臓、そして頭脳へ

そしてつい先日、この企業が3つ目のツルハシを獲得することが決定しました。

1兆円規模の買収を経て、同社が手に入れるのは**フィジカルAIの「頭脳」**。

AIを搭載したロボットは、周囲を認識した後に状況を把握し、次に何を行うのかを判断する必要があります。

従来のチャット型のAIでは、検知した情報を一度遠くにあるデータセンターに飛ばし、計算された答えが返ってくるという仕組みで成り立っていました。

しかし、それはあくまで画面上の世界だからこそ成り立っていた技術です。

自動運転や作業用ロボが目の前の仕事をこなすために、いちいちデータセンターを経由すれば、効率は上がるどころかむしろ危険すら伴うことになります。

そこで今回手に入れたのがデータセンターを経由せず、自律型ロボの本体の中で考える力「エッジコンピューティング」の技術です。

これは安く買える企業を買収して、とってつけたかのような技術を手に入れたわけではありません。

この企業を買収を決めたのはフィジカルAIに進出している**グーグルと公式パートナーシップを提携している企業**です。

つまり、グーグルすら唸らせた頭脳の技術が、この企業に搭載されるということなのです。

事実、この企業のCEOは買収時の会見にて「**AIにおける遥かに大きなチャンスを獲得できるようになる**」と発言。

一方、買収された企業のCEOも「**フィジカルAI分野における成長とリーダーシップを加速させる上で重要な一歩になる**」と心を躍らせています。

これにより、同社は**フィジカルAIにおける「目」「心臓」「頭脳」この3つの急所を握る企業へと進化を遂げました。**

特筆すべきは、この3つの分野が、**フィジカルAI分野のリーダー的企業であるテスラ、エヌビディア、グーグルという3つの企業と繋がりを持っている**ということです。

エヌビディアCEOが「次の産業革命」と称するフィジカルAIトレンド。その中核を担っていくのは3つの急所を握るこの小さな企業かもしれません。

そして今回、この企業の企業名やティッカーコード、より詳細な情報をこちらのレポート「EI革命」にまとめました。

このレポートは、弊社のECサイトでも販売しているレポートです。

ですが、この電子書籍を受け取った方には、よりお得な条件でこのレポートを受け取っていただけます。

その受け取り方については動画版にてお伝えしておりますので、是非動画版をご覧ください。



—免責事項—

- 本コンテンツはお客様の投資判断や運用戦略の参考となる情報の提供を目的として作成されたものです。有価証券の取引等の投資は、ご自身の判断と責任において行ってください。
- 本コンテンツは、将来の成果を保証するものではありません。本コンテンツに掲載している情報の収集・分析上昇についての完全な正確性及び信頼性等を保証するものではありません。
- 本コンテンツの利用等に関し、お客様に生じたいかなる損害についても、弊社は何らかの責任を負うものではありません。本コンテンツの情報は、情報そのものに価値があります。
- 本コンテンツの情報を、出版・講演活動及び、その他一切の商用目的に利用すること並びにブログ・SNS・電子メディアによる配信等により、購入者以外の第三者に公開することを固く禁じます。そのような行為は、損害賠償請求等の法的な対応の対象になります。

『新・産業革命』

発行日：2026年9月

発行者：江崎孝彦

発行所：株式会社Wealth On

〒541-0052

大阪府大阪市中央区安土町2丁目3-13

大阪国際ビルディング23F